

芥川だより

発行日*2019年11月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

梵

***** 一部200円です *****



他人の不幸は蜜の味がする

なんとも嫌な言葉だが、誰しも覚えがある。これを利用して政治経済をリードされたら弱者である者はたまらない。リーダーたちが「人命が一番」と繰り返すたびに、その言葉の裏に隠された真意を勘ぐるのは私だけだろうか。豪雨で途方に暮れる多くの人がいる一方で好機到来と金儲けの謀略を練ってほくそえんでいる輩がいるに違いない。

リーマンショックの時、早くしないと日本経済が危ないと不良債権処理の御旗を掲げ弱小の金融機関や多くの会社を踏みつけて政府は暴走した。終身雇用制を壊し正規社員と非正規に分断し、これまで以上に労働者を使い勝手のよい消耗品にしてしまった。労働者には家族があり地域社会を担っていることを無視して金儲けの為なら奴隷のようにこき使い不要になったらクビにする。

半世紀前に就職した証券会社でも、猛烈なノルマと過酷な環境で入社社員が半分ほど辞めた。私もその一人なのだが、社内は軍隊の前線を思わせるような緊張が張り詰めていて思考する余裕がない真空地帯であった。敵は同じ会社の支店であり、目指すは社内トップの営業成績を瞬時も落とさないことであった。私が、退職を申し立てると支店長以下が猛烈に反対した。同僚からの脅しともいえる言葉には参った。退社が決まれば、みんなから村八分にされた。

すでに昔から精神論で鼓舞し和を乱すものは排除する風土を企業経営者も政治家も利用してきたのだ。オリンピック劇場のドサクサに紛れて河川政策の見直しを決めて国策として推進すれば、誰も反対できない巨大な金儲けが待っている。ゼネコンの幹部は「災害地の復興第一」といいながら、大きな災害は金儲けのチャンスと思っているだろう。もちろん、政治家や官僚も多くの利権の蜜の味を楽しみにしているに違いない。政府は、消費税の負を一気に消し公共事業の縛り付けで選挙を有利に出来ると考えている。これは私の妄想だろうか。

死をめぐるあれやこれ(61)

石川 吾郎

食の安全・三題噺

(除草剤・遺伝子組み換え・種子法廃止)

◆その一..最近テレビで除草剤「ラウンドアップ」のCMをよく見る。そういえばホームセンターの棚にもこのボトルが並んでいた。「ご家庭で使える安心な除草剤」の文字。この除草剤は米国モンサント社(現在はドイツ・バイエル社の子会社)が、ベトナム戦争の枯れ葉剤を元に開発したものだ。この除草剤には発ガン性があるとして、米国では四万件以上の訴訟が起こされている。そして今年五月に米国の裁判所は除草剤「ラウンドアップ」(グリホサート)を使用したことが原因でがんを発症したとしてモンサント社に損害賠償金の支払いを命ずる陪審員評決を下している。世界的にも使用禁止や規制強化などをする動きが広がっている。ところが日本は世界と逆に、二〇十七年に穀物のグリホサートの残留基準値を最大百五十倍へと大幅に緩和をした。この事実は日本のメディアはほとんど報道せず、国民の多くはこの事実を知らないままだ。

◆その二..モンサントのビジネスはこの除草剤の販売だけではない。グリホサートに耐性を持つ遺伝子を穀物の種子(ダイズ、トウモロコシなど)に組み込み、遺伝子組み換え作物を作り(特許をとり)世界中にセット販売をして莫大な利益を上げていく。(裏に続く)

農家はグリホサートを大量に撒けば雑草は生えず、生えてくるのは目的の穀物だけになり除草の手間が省ける。一方でモンサントは農家が自家で生産した種子を翌年にまた撒いて栽培することを禁止するので、農家は毎年モンサントから穀物種子と除草剤のセットを購入し続けなければならぬ。このモンサントのビジネスは、特にラテンアメリカなどで広がって、この除草剤の健康被害が報告されている。また近年にはグリホサートに耐性をもつ雑草が出てきていることも深刻な問題になっている。

◆その三…二〇一七年安保法の成立と同じ頃に、主要農作物種子法を「廃止」する法案が成立させられた。種子法は戦後食糧難の時代に、今後再び国民を飢えさせないとの目的をもって制定された。国が予算を講じて自治体が作物の種子を管理し、その地域に合った作物の種の開発・普及を自治体に義務づけている。また農家に安価で優良な種を提供することも種子法が各自治体に義務付けている。この種子法に特段に不具合はない。少なくとも「廃止」するほど重大な問題があるわけではなかった。あるとすれば、種子法が「遺伝子組み換え作物」の栽培としての普及を妨げ、モンサントのような遺伝子組み換え種子と農薬・除草剤を手広く販売するグローバル企業が日本に本格進出してビジネスをする障壁になっている、ということが考えられるくらい。

種子法が廃止され二〇一九年から自治体に予算が付かなくなった。これらの動きから、種子法廃止がモンサントなどの遺伝子組み換え作物の導入・栽培に道を開く規制緩和であることは明か。そういえば

「遺伝子組み換え食品でない」の表示も撤廃されるという。種子を独占的なグローバル企業から購入するとなると、場合によっては価格が従来に比較して十倍にも跳ね上がる可能性もあるという。それだけでなく、これまでに自治体が営々と蓄積してきた種子の情報などをハゲタカ企業に公開することまでさせる。種子法の廃止は、日本の国民の基礎的食料である米や麦や大豆などの種子を国が守る政策を放棄してしまうことを意味する。モンサントなど外資系企業を導き入れ、国民の主要な食料であるイネやダイズなどの種子を支配させてしまう道を開くものになるのだ。

◆安倍政権はこれまですでに、わが国の平和主義や報道や雇用制度などを含む、優れた社会制度や社会インフラを破壊してきた。食の安全も、国民の生命を犠牲にしてグローバル企業に売り飛ばしているのだ。こんな政府をいつまでも許しておけない。

《参考》山田正彦「売り渡される食の安全」(角川新書)
YOUTUBE 動画『巨大企業モンサントの世界戦略』も参照。

芥川だより一五四号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 68	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 18	祖蔵哲	4
大峰奥駈道 28	下村嘉明	6
B級サラリーマン渡世譚 76	明石幸次郎	7
オクラの山たより 38	因生	8
隠された歴史 13	満田正賢	14
街道を行く 7 伊勢本街道 1	成瀬和之	16
私は、私である、という勇氣	下村嘉明	18
編集後記	嘉	19
ふみの道草 17	山椒魚	20
俳句	土田裕 影山武司	20

素老人☆よもだ帳 (68)

坂本一光

◆ありふれた奇跡、再び

— 生きる基本の水と憲法

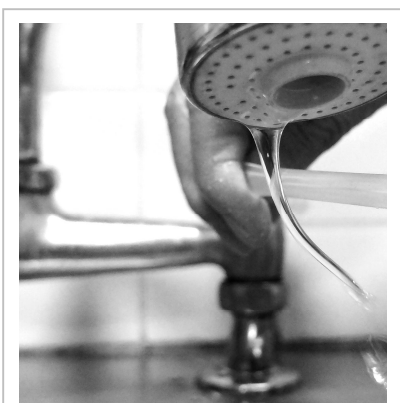
◇水の不思議

まずは水の話。地球は命を育む水の惑星である。水はあらゆるものを溶かすことができ、命と命なきものを互いにつなぐ。こうして地上に存在するものはすべて、互いが互いの一部となる。命を含めて、地球の物質循環を支えるのは水である。

水はどこにでもあるありふれた物質だが、後で触れるような不思議な性質を持っている。直径が1億分の3cmの小さな粒(分子)から出来ている水に、その不思議な性質がなければ、水は氷点下120°Cで凍り(実際は0°C)、氷点下80°C(実際は100°C)で沸とうするという。

そんな地球の風景を見ることは誰にもできないが、そのとき地球には液体の水はなく、生命もない。私たちの前に広がる風景は、水が造りだした風景である。

水の不思議な性質とは、水の粒には電気のような強いプラスとマイナスがあることである。ために、水道の蛇口から水をほそくしたらして、そこへ布でこすったストローをそつと近づけると、あら不思議、静電気に引かれて水が曲がるだろう。



この電気のような極性のため、水の粒どうしは大変に強く引き合い、つながっている。そのため水は熱しにくく冷めにくい。それは地球の気候を温暖に保つのも役立つ。

ありふれたものに奇跡を見なければ奇跡はどこにも永遠にない—命を生み出す地球をつくり、何の毒性もない水。水は自然界における奇跡の最たるものである。

◇水と社会—自然災害と人災

水はあまりにもありふれていて普段は気にも留めないものだが、人と社会（政治）が水との関わり方をまちがうと、水はとんでもないしっぺ返しをする。低気圧、台風、前線などにもなう豪雨被害は自然災害ではあるが、備えを怠った社会が拡大させた人災の要素も強い。

100ミリの「これまで経験したことのないような」雨とは、一時間に畳一畳当たり、一升瓶で100本分の水が雨として降ることである。見わたす限りのどの畳一畳分の広さにも、一升瓶100本である。川を氾濫させ、山を深層崩壊させるのも当然である。地震が加われば、山津波、海津波と被害はさらに拡大する。東日本大震災の津波はまるで一つの生き物であるかのようにつながりうねり、さまざまの様を見せつけた。

原発があれば被害はさらに破壊の度を増す。水を失った原子炉は冷却機能がな

くなり、核燃料はメルトダウンする。そのとき水と反応してできた水素ガスが爆発するなどして、放射性物質を地上にまき散らす。融け落ちた核燃料は地下水にまみれ、際限もなく汚染水を生み続ける。ありふれた水をなめると、水は凶器となつて人間に襲いかかつて来る。

◇もう一つのありふれた奇跡—日本国憲法第九条

自然界にはありふれた奇跡・水がある。世の中にもありふれた奇跡があるだろうか。ある、と私は思う。それは日本国憲法、とりわけ第九条である。憲法は、大戦の惨禍を反省して平和を誓い、戦争および武力行使の永久放棄と戦力の不保持などを宣言している。

戦後日本の心とかたちを規定した憲法は、憲法に基づく政治によってすべての国民に、平和な安全で安心な暮らしを約束した。憲法は、本来、国民にとって水や空気や大地のような、自然そのもののような存在であるはずだった。それが一瞬にして揺らいだのは、憲法に反して集団的自衛権の行使を容認したあの戦争法を、安倍政権が強行採決したときである。大国の思惑により戦争が絶えなかった戦後の国際社会で、また近年、戦とテロが横行する時代に、日本は七十年以上になつた。平和であることを忘れてしまふほ

どに、ありふれた平和であったかかもしれない。この日本の平和を、日米安保条約やそれに基づく米軍基地がもたらしたか。決してそうではない。第九条に象徴される日本国憲法が、たとえかろうじて、であろうと一人も殺さず一人の戦死者も出さなかつた日本の平和を実現したのである。

九条の国なればこそありふれた昇る朝日も平和の光景—自衛隊違憲論に終止符を打ちたいから憲法を変えろという人が、最強の戦争国から武器の爆買いをしている。憲法を変えるとは、この国の平和の光景を変えることである。水がありふれた奇跡であるように、憲法第九条もまた、ありふれた奇跡である。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

（補講とは言うがご容赦繰り返し）

○氷が水に浮く、何の不思議もない不思議

固体がその液体に沈む物質は水のほかにない。粒がしつかり詰まった固体は、詰まり方がゆるんで流動する液体に沈むのが道理である。氷はなぜ水に浮くのか。水は電気を持つ。水の粒（分子）には、電気のようにプラスとマイナスがある。水の分子は H_2O と書き、 H は水素、 O は酸素。プラスは \oplus 原子が、マイナスは

○原子を持つ。また、 $\text{H}-\text{O}-\text{H}$ の角度は 104.5° で折れ曲がっている。

水は電気を持ち折れ曲がったかたちをしていることから、他の小さな分子から成る物質と違って、凍るときに水の分子はしつかりと密に詰まらず、水の状態のときよりすき間が広がる。だから氷は水に浮く。

水の中では、どの水分子もその回りを4個の水分子で囲まれている。ある水分子の酸素原子を重心の位置とし、回りの4個の水分子の酸素原子を頂点とする正四面体が無限につながっている構造、それが氷の結晶構造である。正四面体とは、その四面がすべて正三角形である構造である。ちなみに、ダイヤモンドは、炭素原子が氷のようにつながった構造をしている。水と違って電気的な極性を持たない小さな分子から成る物質や、大きくても金属などの原子は、固体の状態では、その回りを出来るだけ多くの分子や原子に囲まれた方がエネルギー的に安定になることが分かっている。典型的には、そのような分子や原子は、その回りを十二個の分子または原子で囲まれる構造を取る（最密充填構造という）。想像してみよう、ビー玉を立体的に出来るだけ密に詰めた構造がそれである。

また、水の分子は電気を持つから、水の分子と分子の間には、他の小さな分子から成る物質よりも十倍も強い力が働く。十倍も強いと言うが、水分子間の結合の

強さは、原子間の結合やイオン間の結合に比べれば、その十分の一ほどの強さである。水が電気を持たなければ、電気を持つていても折れ曲がっていなければ（つまり、水が、氷が水に浮くような物質でなければ）、先に述べたとおり、水は氷点下120℃で凍り、氷点下80℃で沸とうするという。そのとき、地球に液体の水はない。生命も生まれぬ。生命あふれる青い地球のありふれた風景は、水が生み出した風景である。ありふれた水は、ありふれた奇跡そのものである。

水がありふれた奇跡であるように、これも先に述べたとおりであるが、人の世にはもう一つのありふれた奇跡がある。それは、戦が絶えることがなかった世界で戦後七十年を超えて日本に平和をもたらした日本国憲法、とりわけ第九条である。ありふれた奇跡・水と憲法―そのどちらも、私たちが生きる基本に関わるものである。

哲爺の時事放談 (18)

祖蔵 哲

「歴史問題」とは

「歴史」とは何か。それは学問か物語か。私たちは日常でもこの「歴史」という言葉はたびたび使っている。学問としては、学校の歴史教科書や歴史資料館な

どの学術的なものとしての概念。一方で家族の歴史とか人生の歴史とかといった物語としての概念である。これらの違いは学問の方が具体的な事実資料に基づいて記述されるのに対して、後者の歴史概念はもっぱら個人や集団の記憶に基づいて語られるという違いであろう。前者が要求されるのは「客観性」であり、後者は「主観性」に基づくという基本的な相違もある。

この両者が交わり議論されるのがいわゆる「歴史問題」である。この「歴史問題」の対立は「個人」「共同体」「国家」「民族」「人種」など、それぞれに自己が属する集団にたいしての帰属同一性(アイデンティティ)の問題に還元される。人間というものは「自己とは何者か」を常に理性的に確認、つまり「自己意識」を持たなければ生きていけない存在でもある。ドイツの哲学者ヘーゲルの著した「精神現象学」はこのような「人間の意識」が「歴史」と「自己」の同一性を獲得する壮大な「哲学物語」である。まず、生まれたての自分、自分であるというだけの「自己意識」は「他者」を知らないし、むしろ対立する。しかし、その「他者」の存在を通じて、自分も存在しているという「外界」を知る。やがて、自分も含めて複数の「自己」が「世界」を作っているということを知り、本来の「自己である他者」と「和解」し「歴史が終わる」という筋書きである。これがヘー

ゲルの弁証法的「主観と客観の一致」である。今月は冒頭から小難しい哲学用語が出てきたが、一転して最もタイムリーで具体的な「歴史問題」から入っている。

(1) 主観的歴史対立と「徴用工問題」

「歴史問題」としての「徴用工問題」は具体的には第二次世界大戦中日本の統治下にあった朝鮮および中国での日本企業、業の募集や徴用により労働した元労働者及びその遺族による「訴訟問題」として表れてきている歴史上の問題である。その「訴訟内容」は、彼らが当時奴隷のよう扱われたとし、現地の複数の日本企業を相手に損害賠償を求めているというものだ。

そもそも、このような訴えは第二次大戦後、日本の敗戦と同時に生じてきた「戦後賠償」の一環でもある。戦争には勝者と敗者があるが、戦争自体が「超法規的」なもので、勝者が勝手に戦中の不法行為をなかつたことにし責任を回避できるのかというところでもない。しかし、だからといって敗者が強くその権利を主張できるのかといつてもそこは現実的には微妙であろう。いまでも「議論」されている「東京裁判史観」などはその例である。さらに問題が複雑なのは「勝者対敗者」ではなく、そもそも「戦争当事外者」の損害倍書である。つまり他国間の戦争に巻き込まれた国々である。これら

を含めて日本の「戦後賠償」は「戦争当事国」すなわち旧連合国、「被戦争関係国」東、東南アジア各国に対して条約として一定の「合意」を得ている。その条約とは「平和条約」や「経済協定」として名称は異なるがいずれにも「賠償」という項目が「国家間の約束」という形で入っている。しかし、今「問題」となっているのはその条約が「国家間での取り決め」であれば①「個人の請求権」が放棄されるのかとか、経済的な補償は解決するかどうかである。さらには②「人道的問題」に対する補償はどうなるのかである。さらに複雑になるのは「戦争当事国」であり被戦争関係国であった国、つまり当時の③「植民地」であった国の問題である。大まかにはこの三つの問題が主なテーマである。

中国での徴用工訴訟は2014年、三菱マテリアルは、中国人強制労働被害者が中国で訴訟を提起してから10年後に企業間で和解している。西松建設も同様である。中国は1972年、日本との国交正常化の時、共同声明で「中国政府は両国の友好のために戦争賠償請求権を放棄すると宣言した。日本企業らはこれを理由に法的責任は否認しているが、個人に和解の形式で補償したり謝罪をしてきた。しかし、現在問題となっている「韓国」はこれらの事情とは異なる。なぜなら中国は侵略はされたが「植民地」ではなく、韓国は「植民地」であったからである。中国と同じように韓国での戦後補償問

題を対象にした「条約」が1963年の「日韓請求権協定」である。その韓国との戦後補償について「完全かつ最終的に解決した」とするこの協定が「解決済み」なのかどうか今回の「徴用工問題」である。

(2) 「歴史問題」何が「解決済み」か

日本と韓国の間では第二次大戦が終わってから20年経過してやっと、1965年12月18日に国交が正常化した。それに先駆けて同年6月22日に、旧植民地と宗主国との関係を正常化する目的で、日韓基本条約と共に結ばれたのが「日韓請求権協定」である。この歴史的経緯が問題をさらに複雑にしている。つまり、当時の韓国は独裁政権からやっとな民主化したばかりで十分に民意が反映されていない状態で条約を結んだという言い分である。さらに韓国という国の国力が回復すると、国民の権利意識も高まる。また、昨今の人権問題も世論に影響を及ぼしている。また、具体的な補償金の問題もある。それは賠償金といっても具体的なお金が支払われたわけではない。無償で3億米ドル相当、また貸付で3億米ドル相当、合わせて6億米ドル相当の経済協力を10年かけて行うことが取り決められたのである。しかし、お金が回ってきたのは日本企業いわゆる「紐付き」支援である。さらに「植民地差別」や「強制」

など精神的苦痛が果たして「お金」で償われるのかどうか。そのお金さえ怪しいとなれば何が「解決済み」なのか解らない。

また「条約」によって「国家間の請求権」が放棄されたとしても「個人の請求権」が消滅するのかわという法律的問題も残る。ここでは日本国自身が不利な立場にある。今回の日本国の主張は「日韓請求権協定によって、個人の請求権は消滅した」という立場である。

日本と米国が請求権を互いに放棄する条項は1951年のサンフランシスコ講和条約にもある。ところが、後に原爆被害者が「条約により米国に賠償請求できなくなった」として日本政府に賠償を求めて提訴すると、政府は「自国民の損害について、相手国の責任を追究する『外交保護権』を放棄したもの。個人が直接賠償を求める権利に影響はなく、国に賠償の義務はない」と主張した。日本の戦争責任を回避し、自国がその肩代わりをする義務を免れたためであった。このように現在でも日本政府の立場は「条約では個人の請求権は消滅しない」という立場である。ところが、2000年代に重要な争点で国や企業に不利な判決が出始めると、国は「条約で裁判での請求はできなくなった」との主張に転じている。まったくのご都合主義だ。これらの矛盾した「自己不同一」を現実の国家は行っているのである。

(3) 客観的な正義はあるのか「国際裁判」へ

さて、このように日韓両国の「問題意識」は大きく食い違っている。そして日本政府は大見えをきって国際裁判所に訴えるといっている。では国際裁判所に提訴された場合はいかなる客観的な問題が審議されるのだろうか。予想されるのは

(1) 「徴用工問題」でとりあげた三つの問題①個人請求権②人道問題③植民地支配であろう。①の問題は日本国の自己矛盾として退けられる可能性がある。そして②の人権問題は先にも言及したが近日的なテーマでもあり、金銭的な解決では決着がつかない問題である。さらに「謝罪」といっても「口先だけ」というものや「程度」の問題を持ち出すと解決がつかない。さらに最大の問題は③の植民地支配問題である。これはまさしく「パンドラの箱を開ける」ということに等しい。植民地というテーマは近代世界の大きな負の遺産である。この概念を実行したのはいま大きく西欧列国であり、どこまで過去にさかのぼれるのかという問題にもなる。このように考えると「国際裁判」に訴えて「客観的な立場」で白黒をつけるという効果は現実的でないことが推測される。

後半ではこの「歴史」の見方を「客観性」という方向から考えてみる。

(4) 客観的学問としての歴史―「歴史学」

『歴史学とは、過去の「史料」を評価・検証する過程を通して歴史の「事実」、及びそれらの関連を追究する学問である。』と定義されている。冒頭の「歴史とは」でも話したが、人間というものは、古来より「時空」つまり、「時間と空間」具体的には「世界や歴史」の成り立ちや経緯を知り、語ろうとする本能的な行為を持っている。それは神話や昔話になって世界中に残っている。文字を持っていた種族はそれらが現在も残されているが、文字などを持たない文明を築いていた種族では口頭によって伝承されてはいただろうが、その子孫が途絶えると消滅していく。それらの残された形はいずれであれ「歴史」を作ってきている。それらのうちで目に見える形で残されているものとして二種類の「歴史資料」＝「史料」がある。一つは「伝承する」ということを目的に作成された書物すなわち「歴史書」である。しかしこれは権威の自己正当化のために作成され、誇大表現、作弄的なものを含み「事実」とは異なる可能性も含まれる。さらにその「事実」さえ敵対者であれば意図的に「消滅」されることのできる。いわゆる「捏造」や「焚書」

である。現在でも例の「森友決裁文書の改竄事件」が起こっているのである。こうなると「直接的史料」自体の「事実性」の客観性は薄らぐ。これらの恣意的な「主観的史料」に対して「客観的史料」がある。これは歴史人の機能、行為の結果として残った都市、建築物、道具など「個人」や「特定集団」の意識を具体化したものではなく主観的なものであっても中立的な「客観史料」である。

歴史学が対象にするのは「この史料」をいかに解釈し、「物語る」のかという学問であるであろうが、「史料」自体の信頼性、事実性が疑わしい場合はいかにすればよいのであろうか。ここの「客観的学問としての歴史学」のかかえる「問題性」がある。

(5) 「歴史問題」はなぜ起こるのか。

なぜ「徴用工問題」のような「歴史問題」が起きるのか。それは「誤った客観に基づいた主観の対立」である。さらに問題を混乱させているのは「主観」自体の自己矛盾である。表現があまりにも哲学概念過ぎていたので非常にわかりづらいので「徴用工問題」を具体化してみよう。つまり一方の主観である日本は過去には「請求権が消滅していない」と言いながら「消滅している」といい。そして、具体的事実つまり「歴史史料」は植民地統治をしていた当事者しか持ちえないし、

それを「廃棄」している。それをもって「どこに証拠がある」と自分で破棄して、その存在を他者に証明させるという自己矛盾。終戦時に日本帝国は自国に不利な書類は一切償却せよという命令を出しているのは「歴史的事実」である。さらに韓国側の方にも、協定締結時の政府、つまり国家の正当性の疑問を持ち出さざるを得ないことなど、事実とは異なる誤った主観性がある。このような「疑わしい客観性」と「混乱した主観性」によつて出来上がった「歴史」「問題」がないということとはあり得ない。

(6) 「物語の歴史」から「物語る歴史」へ「相互承認の歴史」

客観的学問としての「歴史」が主観的個人に影響を及ぼすのが学校教育での「歴史教科書」である。この「歴史教科書」も多くの問題を抱えている。「検定問題」「表記問題」「歴史修正問題」などである。「歴史修正主義」はこの流れの中にあるが、以前とより上げたように日本の「歴史修正主義」は単なる「復古主義」、復古といつても奈良時代や平安時代という文化的歴史ではなく、「明治時代」という「帝國的覇権主義」に戻ることを指す。この風潮は「グローバル化された世界」による「格差」への感情的反動であり、没個性的全体主義的愛国主義を懐かむ風潮である。これが単なる「家族愛」「郷土愛」

と結び付けられることによつて「排外主義的自国愛」になるということは現実の世界の動きともリンクしている。このように「教科書」というような「書かれた学問」は「物語」として「創り」「創られ」「教えられ」「読まれる」ものだ。このような「歴史」と私たち「自己」との関係は常に「受け身」でしかない。このことが証明しているのは「歴史」は「創られたように」「歴史史料」は「創作されている」。それに基づいた「学問」すなわち「教科書」はさらに「創作されている」。ここまでくると「想像」と変わらなくなるのではないか。このように異なる「事実」に基づいた「価値観」「歴史観」「世界観」による認識主体に合意や協調、和解や解決はあり得ない。

「歴史」は「語られる」のではなく「語るもの」であろう。「語る」とは「伝承」であり「対話」である。この「互い語る」というなかから「和解」や「承認」が生まれる。そしてそれは固定されることなく「語り継がれる」ものとなるのである。「語り継がれるもの」は恣意的に制御や抑制をされるものではない。なぜなら人間の本来性は「歴史(時間と空間)」を語るもの「だからである」。

大峯奥駈道(28)

下村嘉明

偵察も終わり翌年には奥駈道を吉野から本宮まで通して歩くつもりでトレーニングをしていたのだが、思わぬことが起きてきた。家内の乳がんが見つかり、病状も悪化し先気が不透明になった事と合わせて認知症の婆さんが脳梗塞を併発し入院、と立て続けに不測の事態が起きたので店を閉店することにした。二人の様態が極めて深刻になったので山行どころではなくなったのである。

しかし、私は奥駈道への想いを捨てがたく、いつか来るであろうチャンスを生かすためにもトレーニングだけは続けようと毎朝ランニングを続けた。婆ちゃんは1カ月の治療病棟から6ヶ月のリハビリ病棟を終えて帰宅し在宅介護が始まった。家内は病状が悪く自分の事さえするのが精一杯であったので私が家事と婆ちゃんの介護をすることになった。仕事が介護と家事に代わったのである。割り切ってしまうかどうかということはないのだが、急な展開で初めは面食らった。覚悟を決めてやりだしたのだが、要領が分からずうまく出来なかったが、やるしかないので毎日休まず家事と介護を続けた。そうしながら強く感じたことがある。それは、私が健康で体力を維持しなければ我が家は成り立たないということである。これまで自分の為にトレーニング

グしてきたが、よく考えると家族の為でもあると意識した。

介護には体力がいる。タフな精神力もいる。臭くても汚くても笑い飛ばすくらいのがタフさである。そして何より大事なのがストレスの発散場所である。どうしてもストレスは溜まる。楽観的に考えられず将来への不安感が増して婆ちゃんに当たりたくなるのである。認知症で脳梗塞、介護4の婆ちゃんに何を言っても仕方がないのだが。

たまたま、私は六甲山縦走が好きで幾度となく繰り返し歩いてきた。汗まみれで必死に登ると溜まったストレス発散になることが分かっていたので空いた時間を見つけて続けることにあした。タイトルは「六甲山 チャレンジ1000」と名付けた。

毎朝のジョギングは1時間ほど行い、終われば朝食の用意をしながら婆ちゃんの介護もし、9時になればデイサービスに送り出し、家内の通院がある日は同行して運転をする。

買い物も毎日のように行く。たまに天気も良く家内の通院もなく用事がない時は六甲山へ行く。9時過ぎに家を出て婆ちゃんが帰宅する5時までには必ず帰宅し準備をする。その時間的な制約があるので宝塚駅から六甲最高峰までは行かず、手前の縦走路が道路から分岐する地点を目標にした。宝塚駅から往復6時間が制限時間になった。

B級サラリーマン渡世譚(76)

明石 幸次郎

韓国編(担当者の役割 28)

朝礼が終わったので、明石は自席に座り、今日やるべきことを、ノートに書くこうとしていた時、「おはようございます」とG本嬢が笑顔で近づいてきた。

「昨日は遅くなられたんですか？出張される前に大変ですね」と聞かれたので「いえ、昨日は1次会で解放してもらい、9時には家に帰れたよ」と応えたら「それは、よかったですね。これは、昨日お渡し出来なかった、パスポート、エアチケットとそれと日本円で、支度金、お土産代、仮払金をこの封筒に入れてます。

これは、行きと帰りのタクシーチケット2枚です。明日は伊丹発9時半ですが、2時間前には空港に着くようにされた方が良いでしょう。何時頃、タクシーを予約しておきましょうか？ご自宅はどちらですか？」と聞かれた「帝塚山の社宅です。何時にね？確か同期でS吉が輸出部に居るはずなんだが、この前から顔を見ていないので、どこか出張にでも行っているのかなあ？」

「そうですね？S吉さんは、この前まで、この課でK村さんのグループにおられましたよ。今日は、おられたようですが、聞いてきましようか？」と言ったので「いやいや、あいつにまだ、

挨拶もしていないので、私が行って、聞いてきてから、連絡します。色々、有難う」と席を立って、第一部にいるS吉の方に歩いて行った。

「おはよう！」と肩を叩いたら「おう、明石、こつちに来たんだな。いつからや」「1週間前かなあ。顔見なかったが、どこか、出張に行っていたのか？」「おう、丁度、10日間ほど、エジプト、サウジ、イラクに行っていたのでな」と鼻の下に髭を生やしたS吉が応えた。

「そうか、大変だったな。俺、明日から2泊3日で韓国に行く事になってるんや。お前に教えて欲しいのは、社宅から伊丹まで、タクシーで時間的には、高速を使えば、1時間位で行けるか？」

「それは、時間帯に拠るから、何時のフライトかな。朝早ければ1時間程で着くが」「9時半なんや」「まあ、出発の2時間前に着くこととされているので、まあ、余裕を見て6時にタクシーを予約したら良いと思うぞ」と口を失らせて助言してくれた。

「それは、そうと、明石、お前、転勤してまだ日が経っていないのに、出張か？さすが、K田軍団やなあ。俺も組織が変わる1ヶ月前は、A杉課長、赤シャツのK村さんの下にいたんだ！その前は、国内のサービス技術、俺は、こう見えてもエンジニアやけんね」「それは、知ってたが、普通、技術屋は、入社して配属されるのは、堺の技術本部か工場の製造や

る？」「そうじゃけん、堺の技術本部の設計に配属されたが、一日中図面をドラフトで描いてたが、いつも間違っって叱られていてなあ。上司からか、お前の描いた図面はチェックするのに時間が掛かってしようがないと毎日言われていた。俺の描いた図面を上司が、チェックした積りで正式に図面を関係部門に出して、資材にも配ったが、翌日に、こんな図面で鋳

物部品が造れるかと下請け業者にエライ怒られたと言って資材課長が俺の上司に怒鳴り込んで来てな。それで直ぐ、上司に呼ばれ、お前は設計は向いていないと配属されて2ヶ月目に、サービス技術に移らされた。本当に良かった、はっはっは！元々、俺は、じつと座って図面を描くのが向いていないと人事部に配属前から言っていたのに。人事部は、技術屋は先ず、図面を描く訓練をしないと、物がどうやって現場で苦労して出来るかが分からない。メーカーである限り、もの作り原点は図面にあるから、堺の技術部のエンジン設計に行けと辞令を貰った。

それから」と言い出した時に前の方から、メガネを掛けた上司と思しき人から「S吉！ちよつと、来てくれ！」と大きな声で恐い顔をして呼びつけた。

これを聞いた明石は、朝から隣の雰囲気の違いで、話し込んでしまった自分が同期のS吉に悪かったと思った反面、何や、まだ5分も話しこんでないのに、嫌みたらしく部下を呼びつけるのは、キ

ンタマの小さい上司だなあと思いながらG本嬢の席に行った。

「G本さん、6時にタクシーを呼んでもらえますか。S吉に聞いたら、アイツが何やかやと喋りだして、途中で上司に呼びつけられていた。アイツに悪い事したかなあ」と言うと「6時ですね。はい、分かりました帝塚山社宅の前にといいことで、予約致します。そうですね、S吉さんは、声が大きくてお話されるので、第一部では、少し浮いてしまわれそうですね。ここにおられた時は、もっと大きな声で朝から皆さんと冗談を言いながら長い間、お喋りされてました。それはそれで、あの方のキャラクターはこの部では、許されてましたね」と応えてくれた。

それを聞いていたのか？隣に座っている、赤シャツのK村が「明石、お前、S吉と同期か？」「そうです。住んでる所も同じです」と応えたら「アイツもあんな硬い部門に居て、上昇志向の強い上司で欧米しか力を入れてないのに。アイツの良さが死んでしまう。アイツのええ加減さ、大らかさが、アラブみたいな国を相手にやれるんや。時間は守らない、アラの思し召しやと言って契約は守らない人種と商売しているのに。あの部では、アイツしか、中近東は出来ない。俺が、バンバン鍛えてやったが、組織が変わり市場ごとアイツも、持って行かれたわ。ところで、お前、明日から韓国や

なあ！ちゃんと準備はやってるんか？酒と女と金、それと商社マンには、気を付けるよ！まあ、酒は知らんが、女と金には縁がないような顔してるので、大丈夫やわ。なあ、G本さん！はっはっはっは」と周りの人に聞こえそうに言われた。「褒めて頂いているようで、頑張つて来ます！」と応えた。

それを聞いていたA杉課長は「K村、お前もきつい事を言うなあ、お前等朝から、何を言ってるのや。明石、明日の準備は播但線やなあ」とこれは、兵庫県出身者だけしか分からない親父ギャグを返して来たので、明石は何か言い返そうとしたが、A杉課長の前を通り「それなりに、やってますが、これから、宇都宮工場に部品納入状況の再確認の電話を入れてます」と余裕を見せるように作り笑いをして、その場を退散して自席に戻った。



オクラの山たより (38)

困生

先回までは、小野氏の人々の中にあつて学芸の分野では恐らく頂点に立つだろう小野岑守・篁親子の人生をたどってきました。思えば父親の小野岑守はおそらく良い時代に生きたと言つてもよいでしょう。嵯峨朝における漢学の才への評価の高さ、その評価に十分こたえうる仕事への精進ぶり、その結果として与えられる社会的地位の高さ。いずれも幸せでした。

しかし、その子の篁となると少し様相が変わってきます。

後世の人々からも絶賛された学才の高さ、「これはおかしい」と思えば朝廷、つまりは天皇に対しても直言していく清々しいまでの剛直さ。篁の前半生は輝かしさに包まれたものでした。それに対して晩年の十年ほどはこれといった実績はありません。正史で特筆されている法隆寺の僧善愷(ぜんがい)による訴訟事件でも、死の直前に「あれはまずかった」と自ら反省するほどに強引な主張をして結果から見れば藤原良房の権力掌握のツユ払いをしたに過ぎません。そして晩年の詩の言葉です。

野人閑散立身何 野人閑散として身を立

つることいかん

自課功夫文字魔 自ら功夫を課す文字の魔

礼儀知らずの者が仕事もせずにはラブラして出て世するはずもないが、自分の責務として自らに課しているのは自分が文字に執着する者であることだ。

何事もなすことなく暮らしている自分がただ一つ自負していること、それは漢詩文の徒であることだ、という思いを述べた詩でしょうか。

家柄がさほど高くなくとも大学寮で優れた成績を収めた者が天皇の主催する宴席で得意な詩賦を披露して絶賛を浴び、能力ある官僚として思う存分に腕を振る位階を向上させていく。そうした時代は嵯峨天皇の死とともに終わり、律令では天皇が最高権力者であるはずなのに、幼帝の祖父となった摂関家が事実上の権力者となり、学才の有無よりも家柄の上下のみが重視される時代となつていきました。権力者におもねること。これこそが狭い平安京で生きていた文人官僚の生き残る唯一の道でした。早良親王を初めとして自死した人の多くが怨霊となつたと信じられていた時代であり、極楽往生できず自ら怨霊となるのを極めて恐れていた時代です。文人官僚たちは「こんな惨めで醜い生き方は耐えられない」とかつつよく自裁することもできず、みつと

もない姿ではありませんが「野垂れ生きる道」をやむなく進むほかなかったのです。

二

ここで少し話がわき道にそれますが、「野垂れ生きる」文学者で筆者の頭にすぐ浮かぶのは太宰治です。彼のことについて、もう少し「野垂れ生き」ていく「文人のいやしさ」について理解を深めようと思います。

高校の教科書にも載せられた「富岳百景」の冒頭部分で「私は、暗い便所の中に立ちつくし、窓の金網撫でながら、じめじめ泣いて」とあるように、太宰治はどこかウジウジとしたところのある作家です。

たとえば筆者の大好きな名作「津軽」のクライマックスは乳母代わりであった奉公人の「越野たけ」に出会う場面ですが、そこではこう書かれています。

「ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだいで、私ひとり、粗野で、がらつぱちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたといふ事に気附いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をはつきり知らされた。私は断じて、上品な育ちの男ではない。だうりで、金持ちの子供らしくないところがあつた。」

というぐあいに自分を大事に育ててくれ

た「越野たけ」との出会いのシーンを熱くそして湿っぽく描いています。きりつとしたところは微塵もありません。そして、「津軽」の最後を飾るのが、あの太宰ファンをしびれさすフレーズです。

「さらば読者よ、命あらばまた他日。元気で行かう。絶望するな。では、失敬。」

ウジウジとしながらも表向きには格好よいポーズを付けたがる。考えれば「何ともかんとも情けない男だよ」ともいえる生き方をズルズルと続ける太宰を、徴兵逃れのコンプレックスから終生脱することができずに「凜々しく美しい男」を求めて、ついにはおとぎ話のような妄想につかれて自決した三島由紀夫は徹底的に嫌悪しました。「それでも男か。自殺するにも女性同伴できないとは、情けない。男なら迷わずスパッと見事に腹かき切つて自決せんか。」と思つていたのでしよう。といつても三島もお伴なしでは自決できませんでしたが。

よく知られているように左翼への弾圧激しき戦前に太宰治は日本共産党シンパとしての活動を数年間しています。裕福な家育ちのボンボンであった彼は当然のことながら途中で脱落。しかし、活動家たちとのつながりはずっと持っていたようであつた。戦後、出た手紙が今も残っています。戦後、日本共産党が青森県で活動を再開したときには疎開していた太宰も再建メンバー

に参加していたという高校・大学の同級生であつた日本共産党の黨員でもあつた工藤永蔵氏の証言もあります。ウジウジしながらも心の奥底には奉公人であつた「越野たけ」から受け取つた何ものかがしつかりと存在し続けていたのでしよう。

そんな太宰治が戦時中に書いた小説に「惜別」と「右大臣実朝」があります。日本文学報国会と内閣情報局から「大東亜共同宣言五原則」を小説化し「独立親和」をテーマにせよと依頼されて書いた「惜別」はなめらかな語り口を特徴とする太宰の作風とはうって変わって信じられないほど読みにくい文体になってしまふ。『惜別』は竹内好の文章に触発されて書かれたようなのですが、その御礼も兼ねて「惜別」を中国文学者の竹内好に送つたところ、出征から帰つた武内好から痛烈な批判が返ってきました。彼だ『惜別』の印象はひどく悪かつた。彼だけは戦争便乗にのめり込むまいと信じていた私の期待をこの作品は裏切つた。太宰治、汝もか、という気がして、私は一挙に太宰が嫌いになつた。」

武内好の怒りの原因は太宰が作品の中で魯迅を天皇制讃美者かのようにしてしまつてあることにあるらしいのです。竹内好を怒らせたらしいところを作品の中からさがすと、たとえば日露戦争に従軍している兵士のために十歳ぐらいの娘さんの慰問文に魯迅が感心したというくだりがあります。

「天皇陛下の御ため大日本帝国のために御つくし下さるよう祈つて居ります左様なら」

この娘さんの文章に対して魯迅はたいそう「お気に召し」たようで大息した上で次のように語ります。

「なんの躊躇も無く、すらすらと言つていますね。天皇陛下の御ためにつくせと涼しく言い切つていますね。まるで、もう *naturlich* * なのです。日本人の思想は全部、忠という觀念に *einen* されているのですね。」

(* *naturlich* の 'E' はドイツ語では本来 'D' です。原作では 'D' になっていますが、編集と印刷の都合上 'E' としました。)

といつものように、興奮した時の癖で、さかんドイツ語を連発しながら感心している、と書かれています。

確かにこれでは魯迅が天皇制を讃美しているように見え、一九四五年二月という時代にあつて当局におもねつた「国策小説」と見えなくはありません。

しかし、その一方で「惜別」とは違ひ自ら書こうと思つて書いた「右大臣実朝」は緊張感のとぎれない秀れた作品となっています。その作品の中であられる主人公実朝（太宰の分身といつていいでしょう）の次の言葉が印象に残ります。

「アカルサハ、ホロビノ姿アアロウカ、人モ家モ、暗イウチハマダ滅亡セヌ」

「平家物語」で平家が滅亡する壇ノ浦の

くだりでは知盛が女房たちから「いくさの様子はどのようなのですか?」と聞かれま
す。すると知盛が「只今珍らしき吾妻男
をこそ、御覽せられ候はんずらめ(これか
らすぐにもあなたたちが見たこともない東國
の男たちを御覽になることができるでしょう)」
とこたえて「からからと笑ひけり」とい
う場面があります。この「からからと」
笑ったと琵琶法師が奏したところで先ほ
どの言葉が出てきます。絶望的な状況下
で発せられる何の根拠もない景気よさそ
うな言動、そして豪傑風の高笑い。思え
ば一九四三年頃から後、八月十五日敗戦
の日までの日本の状況そのままですが、
「暗い状況ではあっても自分はマダマダ
死なぬぞ。戦火の中あさましく逃げ回っ
ても死んでたまるか。」そういった太宰
の思いが「暗イウチハマダ滅亡セヌ」に
あるのかもしれない。正に「野垂れ生
き」の真骨頂です。

他の人から見ればみつともない姿でも
自ら死ぬことなく、心の中では「いや、
これは違う。絶対に正しくないことだ」
と唱えながら権力にこびてもウジウジと
生き抜いていく。自死を潔く美しいもの
とはせず、「生き抜く」を基盤において平
凡な生活ながら泥まみれになつてもとこ
とん野垂れ生きていき、「いやしい、情け
ない、人われを醜いと言わば言え」これ
が自分の生き方なのだとする生き方を貫
こうとする太宰治。筆者はそんな太宰治
を嫌いにはなれません。

さて、寄り草が過ぎました。大急ぎで
九世紀中頃の平安京に戻りましょう。

先回、述べた伴善男、藤原良房、藤原
良相は八六六(貞観八)年に起きた天安
門の変の重要なキヤラクターですが、小
野篁が亡くなってから後の事件ですの
で、話を端折ります。ただし、あまり知
られていない藤原良相(ふじわらのよし
み)のことだけ触れておきます。

西三条大臣と呼ばれた藤原良相(八一
三〜八六七)は良房の同腹の弟で八六六
年にあつては良房にとって政治上での最
大のライバルといつてもよい存在でしよ
う。

藤原氏の頂点に立たんがための争いは
後年の藤原兼家と兼通、道隆・伊周(中
関白家)と道長という例を引くまでもな
く激しいものでした。

良房は八六六年に娘の高子を清和天皇
の女御としていましたが、すでに良相も
八六四年の清和天皇元服の際に「婦徳を
称せられた」娘の多美子を女御としてい
ました。また、当時、良相は「好文の卿
相」といわれていました。良相の主宰す
る詩会には大江音人(おおえのおとん
ど)、島田忠臣、都良香、橘広相らといつ
た当代のトップクラスの文人たちが参加
しています。こうした漢字の泰斗といえ
る人がざらりと揃えば当然そのまわりに

は大学寮出身の秀才官僚たちが多くいた
ことでしょう。

橘逸勢を流罪とした承和の変の黒幕は
藤原良房だということはずでに当時の貴
族の常識であつたはずですから良房の評
判はよろしくない。それに対して「好文
の卿相」といわれた良相は大学寮出身の
優秀な官僚層にとつては期待を寄せる人
になつていたのかもしれない。しかも
身寄りのない藤原氏の子弟を收容する崇
親院を設置したとあつては、腐敗してい
く地方政治をいかに立て直すか腐心し
ていた能吏たちにとつては「次代はこの
人だ」という思いもあつたかもしれませ
ん。

歴史家の角田文衛氏は応天門の変で藤
原良房がねらつた真の標的は伴善男では
なく良相だ、といわれていますが、以上
のことから、それも一理ありと筆者は考
えています。

また見過ごすことのできない点ですが
紀夏井という古代まれに見る能吏であつ
た人物までも伴善男の息子の従者の縁者
である(何と遠い関係!)ということだ
流罪に処しています。これはおそらく良
相のまわりにいた秀才官人層を一気につ
ぶすための一策でしょうが、これが当時
の中流貴族層に与えた衝撃も無視できま
せん。

古代の名族の子孫たちが奮起して大学
寮で優秀な成績を取り、能吏となつて実
績を上げ、朝廷の中で重きをなす地位に

上がるということは以後まれな例を除き
(たとえば菅原道真)なくなりました。
家柄、中でも藤原北家が重視される時代
が本格的に始まつたのです。

藤原良房の娘高子が後の陽成天皇とな
る貞明親王を産んだのは、応天門の変で
隠退した良相が亡くなり良相の家の流れ
の没落が確定した八六八年のこととし
た。

四

こうした時代の流れの中で小野篁の子
孫たちはどう生きたのでしょうか。

最も有名な人は小野小町と小野道風で
しよう。

小野小町は小野篁の孫という伝説があ
ります。「小野」と名前がついているので
小野一族には違いないでしょうが、出自
など詳しいことは不明です。

「古今和歌集」の仮名序には紀貫之に
よる小野小町評があり次のように書かれ
ています。

「あはれなるやうにて、つよからず。
いはば、よき女のなやめるところあるに
似たり。つよからぬは、女の歌なるべし。
(しみじみと身にしみいるような歌であるが、
強くはない。いわば、美しい女が病を得た風情
に似ている。強くはないのは、女の歌だからであ
ろう。)」

この紀貫之の評を聞いて小野小町自身
が何というか。「馬鹿いつてんじやないわ

よ。私の若い頃の歌を無視してんだから。第一、女の歌だから弱いだなんて。失礼よ。」とでもいいそうです。この評の根拠となつてゐるのは次の歌です。

① 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ

夢と知りせば さめざらましを

② 色見えて うつろふものは 世の中の人の心の 花にぞありける

わびぬれば 身を浮草の 根をたえて誘ふ水あらば いなむとぞ思ふ

③

右の三首は確かに「弱女」の歌のようですが、「①」は男に恋してしまつたときの歌であり、「②」は恋に破れたときの歌であり、「③」は恋に疲れたときに男から一緒に地方に行かないかと誘われた歌です。こういった状況の時には女性でなくとも男性も気弱になるのではないでしょう。好きだった女性に振られて酒をあおつて酔いつぶれた夜の経験は男性のほとんどに覚えがあるはず。となれば、この評価はどうか、ということになります。

伝説によれば小野小町は出羽国で生まれ育ち父親である小野良真とともに都にやってきました。その後、おそらく都の貴公子たちに評判の女性となり、小町は多くの男性の心を手玉にとつたことでしょう。その中にはあの「色好み」で有名な在原業平もいました。小野小町に振り

回された男たちが何人もいたことは「古今和歌集」を開いてみれば分かります。

しかし、才気煥発、都の人たちの間で評判となつた彼女もやがて恋をして思うに任せぬ悲哀を感じることになりました。

仮名序に紹介された歌①と②はそんなときの歌なのでしょう。やがて彼女も年老いずつと心寄せてくれた男性とともに地方へと旅立つたかもしれせん。その男性の名はおそらく同じ小野一族の小野貞樹。肥後守や甲斐守を歴任した中流貴族です。二人で交わした次の歌がそんな想像をかきたてます。

まず小野小町からの歌。

今はとて 我が身時雨に ふりぬれば言の葉さへ うつろひにけり

(もう、あなたとはお別れですが、私はもう色香は移り、あなたにとって古びて老いた女となりました。時雨がふつて木の葉の色が移ろうように、あなたの言葉も変わってきました。お心もそうなのでしようね。)

この歌への貞樹の返し。

人を思ふ 心木の葉に あらばこそ風のまにまに 散りも乱れぬ

(あなたを思う心がもしも木の葉だったならば、風に吹かれるままに散り散りになつてしまつていでしょう。もちろん、そうではないので、私の心は散り乱れることもなく、あなたを変わらず思い続けています)

二人を包んで降る時雨は、しつとりとし

ていて、二人のこれまでの人生を優しく抱きとめています。落ち着いた二人の詠みぶりからは

「いつの間にこんなに深く長い仲になつたのだろうね。」

「本当にね……思えばずいぶんと長いこと。あなたも私も白髪が見えるようになったわね」

といったような中年にさしかかろうとする男女二人の話し声がこの歌のやりとりから聞こえてくるようです。

もちろん、小野小町がいつどこで亡くなったのかはまったくわかりません。「深草少将」をはじめとして多くの伝説を残してふつと歴史から消えてしまいました。

五

もう一人の人物は小町と同じく小野篁の孫である小野道風(八九四〜九六七)です。道風は例の花札の絵柄で有名です。自分の才能のなさに絶望した道風が青柳に何度も飛びつく蛙を見て「よし、私も何度も練習して頑張ろう。練習は人を裏切らないから。」と奮起する話なのですが、彼の死後、三〇〇年ほど後に成立した「古今著聞集」に面白い話のせられています。

小野道風が空海の書いた額を見て「美福門は田広し、朱雀門は朱雀門なり。(美福門の字の福の田は大きすぎで、朱雀門

の朱は米に見える。下手だね。)」と嘲つたために何と晩年に中風となり、手が不自由になって彼が書いた作品がすべて異様なものとなり世間で「道風のふるい筆」といわれた、という話です。

道風は負けず嫌いで気性の激しいが、少し軽いところのある人であるという評判が当時の人々にあつたのかもしれない。

小野道風は正四位下・内蔵頭に至つてはいますが、能書家として重宝されたくしく実収入の多い地方官、たとえば受領になることはありませんでした。そのため少々あせつてしまつたのか、六十四歳(道風は七十二歳で死亡した)で四位にのぼつたときに道風は「山城守に任ずる」または「近江権介を兼任する」ことの除書(人事異動に関する辞令の書類)を出して欲しいという嘆願書を提出しています。その文章から少し抜き出してみます。

「道風爵級を加えられしより、しばしば星灰を移し、除書を見ることに、しきりに渙渥に漏れぬ。……春秋十二歳の時に、初めて龍顔の聖主に奉じ、芳績五十四年の日に、已に鶴髪の衰翁となれり。……伏して乞ふ。乾臨ことに雨露を降したまはむことを。」

(私こと道風は初めて位階を与えられてから長い年月が経ちますが、任官の書類を見るたびに希望する官職に就くという恩典を受けないということが何度

もありました。……私は十二歳の時に初めて醍醐天皇に仕えて以来、骨折って功績を挙げてくること五十四年。その日々の間に白髪の老人となつてしまいました。……伏して御願ひします。天子よ、私に特別に雨露のような惜しみない恩恵をお下しく下さい。」

当時、四位に任じられた人は「年曆」を経ずして大国の長官になるのが慣例でありました。ほとんど同時期に四位に上つたらしい藤原北家摂関家に近い家柄の藤原兼三はすぐに収入の多い陸奥守に任じられています。では、すでに余命いくばくもない自分はどうなるのか。自分にはそういう恩典はないのか。道風の嘆願書はそういった泣き言に近い文章となつています。しかし、都に近くて収入の多そうな、つまり競争率の厳しい山城と近江の二国のどちらかを彼が望むのは無理であつたようで最後まで都から離れて大国の国守となり莫大な財産を蓄積するということはできませんでした。要するに書の名人だ、ということで権力者にうまく利用されたということでありましょう。中級貴族になつてしまつた小野氏の悲哀です。

は自然体ですつとはいはる起筆、ゆつたりとひ字にカーブしていく筆の運びにあります。その書には優美で温雅な雰囲気漂つています。唐風を脱して和風の書体をつくつたといわれるのももつともなごとと筆者には思えます。一度、道風の書を御覧になつて下さい。唐代の褚遂良や顔真卿の書と比べてみれば道風の時代の人々が創造した和風の書の特徴がよく分かります。

いうまでもありませんが、小野氏の人々で道風だけが能書家として名を馳せたわけではありません。祖父の小野篁も草書と隸書の技法は二王（書聖の王羲之とその子の王献之）に匹敵するといわれ書を学ぶ者の手本になつたと正史にあります。また、道風と同じく篁の孫である小野美材（おのよしき？九〇二）は草書の名人とされ空海ら三筆にも比肩するとされました。三筆と三蹟とをつなぐ能書家として力を発揮したのであるに、残念ながら美材は四十歳前後でなくなつたと見られています。

小野道風の孫に藤原頼通の深い信頼を得ていたうえに天台座主にも至つた明尊（九七一―一〇六三）がいます。明尊が生きたのは山門と寺門の争いが激しい頃であり、明尊の天台座主就任をめぐって延暦寺の悪僧たちが頼通邸に強訴に押しかけ頼通の邸宅に火が放たれるということもありました。明尊は当時としては長

命であり、九十歳になつた祝賀が藤原頼通によつてなされています。

六

小野道風の兄が小野好古（おののよしふる 八八四―九六八）です。

天慶年間に起きた藤原純友の乱に際して追捕使の長官となり乱を鎮めました。その勲功によつて乱の六年後の九四七（天曆二）年、六十四歳の好古は参議の末席に連なることとなります。そして七十八歳の時に祖父篁と同じ従三位に進みます。

好古は武人としてだけでなく何度も太宰府の長官を務めた外交官であることはよく知られています。それ以外にも皇太子が儀式で読み上げる詩を代作したり、檢非違使庁の次官を務めたりするなど行政全般にわたつて能吏としての成果をあげました。さらに小野好古は歌人としても有名であり、外交・軍事・行政・学芸とほぼあらゆる分野で才能を発揮し、小野一族の美点をすべて一身に集めたといつてもよい人物でした。

しかし、彼の死後、小野の一族で参議となり三位以上の位階を持った人物は筆者を見る限りいません。小野好古以後、小野氏は行政面からは離れて武人の家という評価を得て、その放免で活躍する人々を輩出していきます。

武人として有名なのは小野春風です。九世紀後半に活躍した人ですが、元慶の出羽国での蝦夷の反乱を良吏の誉れ高い藤原保則とともに反乱を鎮めました。春風は「累代の将家にして、驍勇、人に超えたり」と賞賛されるほどの武人でしたが、若い頃に東北の辺境の地に暮らしていたことから、「夷語」にも通じていたので、蝦夷の人々の中に入って彼らを懐柔するという方法で反乱を収め都の人から称賛されました。

春風の父、そして兄も有名な武人でした。平安末期から鎌倉初期に関東に武蔵七党と呼ばれる武士団があり、その七党の一つで多摩丘陵を根拠地とする横山党が小野氏の末裔であるということでも有名です。この横山党は鎌倉幕府の初代別当である和田義盛が北条義時と戦つたとき和田義盛と姻戚関係にあるということと和田方につきましましたが、北条氏に敗れ横山党は壊滅的な打撃を受けました。その横山党の一族である中条氏は鎌倉時代には尾張国の守護に任じられ今の豊田市にあつた挙母（ころも）を本拠にして室町時代になつても中条家は続きますが、戦国時代末期、松平元康（徳川家康）に攻められ滅亡します。ただし、中条家の人々が伝えた剣術である中条流には巖流佐々木小次郎という有名な剣士が現われま

戦国時代以降、伝承や自称はあっても確かに小野氏の流れであると確かな裏付けをもつていいうる人は筆者の目にする限りではありません。小野妹子の子孫は歴史の薄暮の中に消えていったというしかないでしょう。

【余談 書かずもがなのこと】

最近、急に読みたくなくて図書館から永井荷風の本を借り出して読んでいます。年齢が荷風と似かよってきたせいか、昔よく分からなかった点や共感できなかったことが「そうだよな」と思えるようになってきています。そうは言っても手にするのは「墨東綺譚」といった小説よりも彼の日記の「断腸亭日乗」や随筆などである。やはり長い小説を読み切るには辛い年になってきたらしい。

そうして読んだ荷風の随筆集の一冊に「冬の蠅」がある。「冬の蠅」と名づけた理由とは、

憎まれてながらふる人 冬の蠅
という其角の句から思いついたものであり「老いてますます憎まるる身なれば」と荷風自らがその序文で書いている。

おぼつかかなげに飛んでいるというのに「あら、あそこにまだいるよ。いやあねえ」と人からいわれるほど凶々しく生きている「冬の蠅」。この句を見て「還暦を

とうに過ぎた自分は冬の蠅なのかな、やっぱりとふつうは落胆するところだが、がっかりするより先に感心してしまうのだ。さすがに宝井其角。うまいこというね、と。

少し調べてみて驚くのはこの「憎まれて……」の句を作ったとき其角は二十七歳であったこと。其角も相当のへそ曲がり嫌われ者であったらしい。憎まれ者どうしでウマが合うのか、荷風はその文章のあちこちで其角を引つ張り出している。

たとえば「断腸亭日乗」一九四四年十月二十九日のところで空襲に備えて強制的に取り払われた川端の町を見て次のように書いている。

「明月庭をてらす。その形を見るに九月十三夜の月なるが如し。其角の句に「家こぼつ木立も寒し後の月」といへるを思出て

川端の町取り払われて後の月」
荷風の目の前に広がるのは自分の愛した江戸Ⅱ東京の惨憺かつ荒涼とした風景である。其角の句を使い「後の月」を眺める思いを述べている。

かくのごとく荷風にとって其角は何かあれば即座に思い浮かべる近い存在であったようである。

その荷風が思わぬことで其角を引つ張り出している。これを読んで其角が喜んだか怒ったか、聞いてみたいような内容

であるが、随筆「妾宅」には次のような一節がある。

「ギリシアローマ以降泰西の文学は如何ほどさかんであったにしても、未だ一人として我が俳諧師其角、一茶の如くに、放屁から小便や野糞までも詩化するほどの大胆を敢てするものは無かったやうである。」

確かに其角にはよく知られた
暁の 反吐はとなりか ほととぎす
という句があり、実をいえば其角の師である芭蕉にも名句とされる

鶯や 餅に糞する 縁のさき
がある。小林一茶にはもつとストレートな内容の

小便所 ここよと馬呼ぶ 小寒かな

屁比べが 又始まるぞ 冬ごもり

屁比べや 夕顔棚の 下涼み

という句がある。小細工が多少あるという点で其角の方が上出来か。人から聞いた話によれば夏目漱石にも

口切りに こはけしからぬ 放屁哉
があるそうである。

日常の会話でも下卑たことを軽い可笑味として取り扱うことのできるのは日本文明固有の特徴だ、それをつくった大天才は江戸人だ、と荷風先生は力説するのだが、この説に即座には首肯しかねる。やはり臭うのはかなわない。

ここまで書いてくると荷風はスカトロジストか、と誤解を招きかねないので、大急ぎで打消しにかからねばならない。

荷風は江戸文化、そして江戸という都市を誰よりも愛していただけであると。

日本の開化、文明化に警鐘を鳴らしたのは漱石が有名だが、荷風は違う方向から日本の近代化をちくりちくりと批判している。荷風は軽佻浮薄に文明化(開化・西洋化)が進められ、次々に消し去られていく江戸の面影をあちこちと尋ね歩き、それを書き綴って後世に残した。随筆集「日和下駄」がそれである。その序文には次のような一節がある。

「……見ずや木造の今土橋ははやくも変じて鉄の釣橋となり、江戸川の岸はセメントにかためられて再び露草の花を見ず。桜田門外また芝赤羽橋向かいの閑地には今まさに土木の工事おこらんとするにあらざや。」

スクラップ・アンド・ビルトというのであるうか、百年前の東京に限らず、私が愛する京都の町でも次々と風情のある町屋が壊されて何とも無粋な高層ホテルに変じている。京都の町が壊されていくのを市民たちが目のあたりにする日々が続いている。それを思えば「荷風さん、よくぞ書いてくれました」と言いたくない。「人々を鉄骨とセメントの中に塗り込めていくことだけが都市の近代化と違うぞ」と。

そして、私ならば、つい荒げた言葉で言いたくなることを荷風先生はまことにリズミカルな文章で書いていく。そこが

隠された歴史(13)

満田正賢

永井荷風の魅力なのだ。名文なのである。名文は声を出して読めばすぐに分かる、とは我が恩師の言葉。リズムがあつて読みやすく分かりやすい文章こそ名文なのだ。たとえば、「日和下駄」の序文はこんな風に始まる。ぜひ声を出して読んで味わってもらいたい。

「人並み外れて丈が高い上にわたしはいつも日和下駄をはき蝙蝠傘をもつて歩く。いかに好く晴れた日も日和下駄に蝙蝠傘でなければ

安心がならぬ。これは年中湿気が多い東京の天気に対して全然信用を置かぬからである。変わりやすいのは男心に秋の空、それにお上の御政事とばかり極まったものではない」

蛇足ながら「女心に秋の空」ではなく「男心」といったり「変わりやすいのはお上の御政事」といったりしているあたりは荷風のへそ曲がりぶりがよく出ている。

永井荷風が戦時中であつて戦争を遂行し続ける政府に迎合することなく戦争協力を拒否し続けられた強靱さの一因が、このへそ曲がりぶりにあるのではといたら言い過ぎか。

日本書紀に記された朝鮮半島記事には、朝鮮半島経営の主体である九州王朝の存在を消すために様々な工夫が見られます。今回はその中でも一番九州王朝の存在を消した痕跡がわかりにくい雄略紀に焦点を絞つてその工夫の跡をたどってみます。最初に雄略紀にある中国および朝鮮半島の関連記事を列挙します。

- ・百済の池津媛が石川楯と密通し、焼き殺された話。雄略二年
- ・百済より軍君(昆支君)が人質として来た話。五年
- ・呉国が遣使して貢献した。六年
- ・吉備上道臣田狭を任那国司に任命したことに始まった一連の事件。六年
- ・身狭村主青と檜隈民使博徳を呉国に遣使した。(二回目) 八年
- ・新羅と高麗の争いに日本を絡ませた記述。八年
- ・紀小弓宿禰らが大将に任命され新羅と闘った時の一連の事件。九年
- ・身狭村主青らが鷲鳥を持ち帰ったが、水間の君の犬に噛まれて死んだ話。十年
- ・百済から帰化した呉国の人貴信の記述。十一年
- ・身狭村主青と檜隈民使博徳を呉国に遣使した。(二回目) 十二年
- ・身狭村主青らが呉国の献じた四人

の織女をつれて帰った話。十四年前年高麗が百済を破つたと聞き、熊津を汶洲王に与え百済を復興させた話。二十一年

- ・百済の文斤王(汶洲王の子)の死にあたり、昆支君の子の末多王を筑紫の兵五百人に護送させ東城王として即位させた話。二十三年
- ・筑紫の安致臣・馬飼臣らが水軍をひきいて高麗を撃つたという記述。二十三年

雄略紀の第一の特徴は、雄略以前の各天皇条に対して、古事記にない記事が大量に記載されていることです。特に古事記には全くといってよいほど記載のない呉国・朝鮮半島関連記事が大量に記載されています。第二の特徴は、他の天皇条の朝鮮半島記事が百済関連史書の記述を引用し、そこに現れた人物の多くを未詳の人物として記しているのに対して、雄略紀には百済関連史書(百済新撰・百済記)の引用はあるものの、未詳の人物をいっさい使うことなく、すべて近畿王朝内の人物名で朝鮮半島(及び呉国)記事を描ききっていることです。

身狭村主青(むさのすぐりあお)と檜隈民使博徳(ひのくまのたみのつかい)はかこの二回にわたる呉国派遣記事は、宋書にある倭王武の遣使記事を想起させます。但し、『天下が『大悪の天皇である』』と言い、ただ寵愛したのは身狭村主青と檜隈民使博徳らであるという」という雄

略二年の記述は、数少ない寵臣を、危険を伴い長期にわたる海外渡航に二度も派遣したというところで、逆に真实性を疑わせる結果となっています。

一方で、内容を吟味すると一連の記事の中におかしな部分が含まれています。一回目の渡航には「水間の君」という人物が出てきます。この「水間の君」は別本では「筑紫の嶺の泉主泥(ね)麻呂」と記されていると記載されていますが、「水間の君」は景行紀に出てくる「水沼縣主」(福岡県三潴(みづま)郡)久留米の近く)と同一ではないかと考えられています。(本件に関しては古田史学会で多く論じられています。)いずれにしても筑紫という地名が出てくることから、一回目の渡航記事全体が九州王朝に残っていた記事からの借り物である可能性が高いと思われれます。

二回目の渡航記事の「呉国の献じた四人の織姫の話」は応神紀四十一年の話と酷似しています。応神紀と雄略紀の話が同じ伝承を記したものでないかということも多く論じられていることです。応神紀では兄媛は胸肩大神に奉じられています。雄略紀では同じ名前前の兄媛が大輪神に奉じられています。大三輪神という大和を想起させますが、逸文筑前国風土記に筑前にある大三輪神社の存在が記されています。古田史学では、倭の五王時代の九州王朝の都は高良大社のある久留米周辺(筑後地方)と考えられて

います。すなわち「四人の織姫のうち兄媛は筑前の有力者に奉じられ、残りの三人が都（筑後）にやってきた」という九州王朝に残っていた伝承を応神紀も雄略紀も使ったと推定しています。

次に昆支君が人質として来た話について考察します。雄略紀が引用している百濟新撰には「辛丑の年に蓋鹵王（こうろおう）は弟の昆支君を遣わして大倭に向かい天王に侍した。もって兄王のよしみを修めたのである。」と記されており、昆支君が人質として日本に来たのは史実でしょう。しかし、百濟の昆支君の子の末多王を筑紫の兵五百人に護送させたという記事から、昆支君及び末多王が居た場所は筑紫であると思われる。羽曳野市（近つ飛鳥と呼ばれていた地域の中）にある飛鳥戸神社が昆支君を祀っているという伝承がありますが、考古学的な証拠はなく、飛鳥戸神社の創建年代も不詳であり、ただ新撰姓氏録に「河内国諸蕃飛鳥戸造出自百濟国主比有王男（ひゆうおうのむすこ）琨伎王也」という記述があることが根拠となっています。雄略紀には「軍君（こにきし…昆支君）が入京した。すでに五子があった。」と記されていますが、昆支君が京から近つ飛鳥に移動した経緯は日本書紀のどこにも書かれていません。飛鳥戸造の系譜はこの地に住み着いた渡来人によって後世作られた系譜である可能性が高いと思われる。

新羅と高麗の争いに日本を絡ませた記

述と、前年高麗が百濟を破ったと聞き熊津を汶洲王に与え百濟を復興させた話の詳細を見ると、この二つの記事に共通しているのは、朝鮮半島で起こった事件に無理矢理日本を絡ませていることです。

新羅と高麗の話には、「任那王は膳臣斑鳩吉備臣小梨、難波吉士赤目子をすすめて、新羅救援に行かせた。」膳臣は新羅に語って『汝はいたつて弱いの、いたつて強いのに当たつた。官軍が救わなかつたら、必ず乗せられるところだつた。この役でほとんど、外国の地に成るところだつた。今から以後、けつして天朝（日本の天皇のこと）には背いてならぬ。』といった。という記述があり、高麗が百濟を破つた話には、「時の人はみな、『百濟国は王属がまつたく亡び、倉下に集まつて心配していたが、実に天皇のおかげで、ふたたびその国を造つた。』といった。」という記述があります。日本が朝鮮諸国の目上にした史実を極めて露骨に作り出しています。そして注目すべきは、その文章の中に前後の脈絡もなく膳臣斑鳩など日本人の人物名が使われていることです。

吉備上道臣田狭（かみつみちのおみたさ）を任那国司に任命したことに始まつた一連の事件について、この事件直前の国内記事を含めて一連の事件の詳細を列記してみます。

・吉備弓削部虚空（ゆげべのおみおぞら）が家に戻つた際、京に上るのを吉

備下道臣前津屋（しもつみちのおみさきつや）がとどめて、天皇が派遣した物部の兵士三十人に同族七十人ともども誅殺された。

・天皇が吉備上道臣田狭の婦・稚媛（わかひめ）を手に入れようとして田狭を任那国司に任命した。

・田狭は天皇が稚媛を寵愛したと聞き、助けを求めて新羅に入ろうとした。

・天皇は田狭の子・弟君（おときみ）と吉備海部直（あまのあた）赤尾とに詔して、「汝行つて新羅を罰せよ」と言つた。この時西漢才伎歆因知利（こうちのあやのてひとかんいんちり）が進み出て「私より巧みなものは韓国にはたくさんおられます。」と奏した。天皇は群臣に「歆因知利を弟君に副え、百濟に行つて勅書を下し巧みなものをたてまつらせよ」といつた。

・弟君は百濟で新羅への遠近を老女（国つ神）に聞き、伐たずに戻つてきた。

・任那の国司田狭臣は弟君を戒めて、百濟と日本を通じさせるなと言つた。

・弟君の婦の樟媛（くすひめ）はこの謀反を嫌悪し、夫を殺し、海部直赤尾とともに百濟の献じた手末才伎（たなすえのてひと）をひきいて大嶋にいた。

・天皇は日鷹吉士堅磐固安銭（ひたかのきしかたしはこあんせん）を遣わし、共に復命させた。

・才伎を倭国の吾礪廣津（あとひろつ）の邑に落ち着かせたが、病死するもの

が多かつた。

・そこで天皇は同伴大連室屋に詔して東漢直掬（やまとのあやのあたいつか）に命じ、新漢陶部高貴（いまきのあやのすえつくりべのこうき）、鞍部（くらつくりべ）の堅貴（けんき）、画部（えかきべ）の因斯羅我（いんしらが）、錦部（にしごりべ）の定安那錦（じょうあんなこむ）、詛語（おさし通訳）の卯安那（みょうあんな）らを、上桃原・下桃原・真神原の三箇所に移住させた。

以上がこの事件の一連の推移です。雄略期である五世紀頃には、吉備には造山（つくりやま）古墳や作山（つくりやま）古墳などの巨大古墳が建造され、近畿王朝に対抗しうる勢力が存在していたと想定されています。一方で、吉備勢力の朝鮮半島への出兵の記事は日本書紀以外には記されていません。ちなみに扶桑略記（平安時代の私撰歴史書）の雄略条には①百濟池津媛②呉使来献③遣使呉国④新羅と高麗の確執（日本人は出てこない）⑤高麗による百濟の滅亡、の記事は載っていますが、吉備上道臣田狭を任那国司に任命したことに始まつた一連の事件と紀小弓宿禰らが大将に任命され新羅と闘つた時の一連の事件については記されていません。扶桑略記の編者はこの二つの記述が完全な作文であることを読みとり採用を避けたのではないのでしょうか。吉備上道臣田狭を任那国司に任命したことに始まつた一連の事件については吉備近

が多かつた。

畿王朝による吉備征服又は吉備の内紛の話と、百濟から多くの才伎を招き国内に移住させた話とが合体されたものと思われまゝ。そして合体の手法として吉備征服の話の背景に朝鮮半島を置いたということが読み取れます。

紀小弓宿禰らが大将に任命され新羅と闘った時の一連の事件についても、この事件前後の国内記事を含めて一連の事件の詳細を列記します。

・天皇はみづから新羅を征伐しようと思つたが、神が戒めた。紀小弓（きのおゆみ）宿禰・曾我韓子（そがのからこ）宿禰・大伴談（かたり）連・小鹿火（おかし）宿禰に勅し、四卿を新羅征伐の大将に任命した。

・紀小弓宿禰は大伴室屋大連を通じて婦がなくつたばかりと申し述べ、天皇は吉備上道の采女（うなめ）の大海（おおあま）を賜わつた。

・紀小弓宿禰らは新羅に入った。新羅は大敗。

・残敵との戦いで大伴談連と紀の岡崎の来目（くめ）連が死んだ。

・談連の従者・津麻呂はそれを聞いて同時に命を落とした。

・大将紀小弓宿禰は病をえて薨じた。

・紀大磐宿禰は、父の死を聞き新羅に向かい、小鹿火宿禰の兵馬船役人と諸小役人を掌握した。小鹿火宿禰は大磐宿禰を怨んだ。

・小鹿火宿禰が韓子宿禰に告げ口をして、

韓子宿禰と大磐宿禰が仲たがひした。この三臣は以前からたがいに競ひ合つていたが、途中で乱れて、百濟の宮に至らざるもどつてしまつた。

・采女の大海は小弓宿禰の喪によつて日本に帰り、大伴室屋大連に相談して勅を奉じて土師（はじ）連小鳥（おとり）をして冢墓を田身輪（たむわ）の邑に作り葬らせた。

・大海は韓奴の室、兄麻呂、弟麻呂、御倉、小倉、針、六人を大連に送つた。吉備の上道の蚊（か）島田の邑の家人部（やけひとべ）がそれである。

・小鹿火宿禰は角の国（周防国都濃郡）に留まつた。倭子（やまとこ）連（未詳）をして、八咫鏡を大伴大連に奉つた。

以上が一連の推移です。これをみると、近畿王朝配下の將軍間の諍いを記した記事であるように見えます。そしてここでも朝鮮半島が舞台になっていきます。しかし、吉備上道臣田狭を任那国司に任命したことには始まつた一連の事件が吉備征服の事件の舞台を朝鮮半島に置換えたのみられるように、ここでも国内で起こつた事件の舞台を朝鮮半島に置換えた疑いが強いと思われまゝ。登場人物の一人に吉備上道の采女の大海がいることから、この事件も吉備征服の事件の記述ではないでしょうか。すなわち吉備上道臣田狭の話は吉備征服譚を吉備側から捉えた記事であり、紀小弓宿禰の話は吉備征服譚を

吉備に派遣された近畿王朝の將軍側から捉えた記事ではないでしょうか。

倭王武が雄略であるという説は通説論者のほとんどすべての人が最も確信を持つて主張している説です。稻荷山鉄剣や江田船山鉄刀の銘文にある名前を「ワカタケル」と読み取つたのには、倭王武の上奏文を近畿王朝による日本統一の経緯と理解したことが背景にあります。そしてその理解は、年代的に雄略期が倭王武の時代に重なつており、なおかつ日本書紀の雄略紀に呉への使者の派遣記事や多くの朝鮮半島記事があることによります。

しかし、上記の考察の結果、日本書紀の雄略紀に記された宋書や百濟新撰を引用した記述については、九州王朝に残つていた伝承を拝借して記述した可能性が高いことが判明しました。一方、朝鮮半島を舞台にした大量の記事は近畿王朝による吉備征服譚の記事を、見方を変えかつ舞台を朝鮮半島に変えて記載したものである可能性が高いことも判明しました。雄略紀は日本書紀の他の条のように、朝鮮半島の史書に実際に記された未詳な人物を近畿王朝の人物に置換えて話を作り上げるといふ手法をとらず、国内記事の舞台を朝鮮半島に移し、日本が朝鮮諸国の目上にいたといふことを露骨にアピールしている点で、日本書紀全体の中でも極めて悪質な作文であると考えられます。

街道をゆく (7)

成瀬和之

「伊勢本街道」(一)

大宇陀おおうだくかぎろひの丘を歩く

高校時代の同期生で、「伊勢本街道を踏破しよう」といふ企画が立ち上がりました。榛原在住で伊勢本街道関係のご著書もある菅谷先生の講義を聞いて、伊勢本街道を二三年かけて歩きます。その企画に「我が奥の細道の旅」を終えた私も参加することにしました。

第一回目は、大宇陀くかぎろひの丘を歩くです。二〇一八年五月一六日（水）一〇時榛原駅集合。二三名の参加。バスで大宇陀へ。

宇陀松山地区を歩きました。午前中は自由行動です。

宇陀松山地区は、戦国期に在地地主であつた秋山氏の居城と城下集落として誕生し、織豊期から江戸期初頭にかけて、豊臣家配下の大名によつて大規模に整備されました。一六一五年、織田信雄が宇陀松山藩主となつてから八〇年間の小田家の治世を経て、幕府領へと移り変わつていく中で、商家町として繁栄し、その活況ぶりは「松山千軒」「宇陀千軒」とも称されたと伝わります。

また、菓の町としての側面もあり、江

戸時代後期には、地区内に五十軒を超える薬種問屋がありました。宇陀は古来不老不死の妙薬と信じられていた水銀の産出地として知られていました。その神秘性が神仙思想と結びつき、宇陀で採れる薬草や獣を食べることで聖なる力を持つと考えられたことから、宇陀は王権の狩猟場となっていました。『日本書記』には推古十九年(六一一年)五月、菟田野(うだのの)で薬猟をしたという記載があります。これは日本最初の薬猟の記述であり、現代に続く「薬のまち宇陀」の源流ともなっています。

江戸期から続く伝統的な建造物群が全体として意匠的に優秀であることから、二〇〇六年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

(森野旧薬園)

江戸時代の享保年間十一代目森野藤助が自宅の裏山に開いた日本最古の薬草園。約二五〇種類の薬草木が、珍しいものもあり見どころです。

(万葉公園・かぎろひの丘)

「東の野にかぎろひの 立つ見えてかへり見すれば 月かたぶきぬ」

万葉集の中でも秀歌と讃えられるこの歌は、六九二年一月一七日(旧暦)持統天皇の孫・軽皇子がここ阿騎野の地に遊獵の際、随行していた歌人の柿本人麻呂が詠んだものです。この歌の中に含ま

れている「かぎろひ」とは、嚴冬の良く晴れた雲一つない早朝、夜明けの一時間に現れる陽光のことです。

万葉公園かぎろひの丘に佇むこの歌の万葉歌碑は、歌人・佐々木信綱氏により揮毫されたものです。万葉公園には、万葉植物の植栽や東屋、遊歩道が整備されており、はるか万葉のロマンにひたることができます。この東屋でお昼ご飯を食べました。

(阿騎野・人麻呂公園)

飛鳥時代を中心とする遺跡である中之庄遺跡を整備した人麻呂公園には、この秀歌を詠んだ情景を思い起こさせるような、馬に乗った柿本人麻呂の石像が再現されており、古を偲ぶことができます。

(阿紀神社)

延喜式内社。『皇太神宮儀式帳』に、天照大神は垂仁天皇の時代に倭姫命を御杖代として美和の諸宮を發し、宇太の阿貴宮に座して、そこから佐々波多宮に行つたとあり、その「宇太の阿貴宮」が当社であるとされています。

(高天原)

阿紀神社のすぐ側に「高天原」への登り口があり、阿紀神社・大宇陀観光協会の説明版が立っています。そこには、「高天原は神々のおすまいになられる処、又は御降臨なさる処で、古来より最も神

聖な場所とされています。此処は阿紀神社の旧社地で、平安時代に現社地に御遷しするまではこの高天原で天照大御神様をお祀りしていました」とあります。

(萩原の辻)

萩原の辻は、高札場であったため札の辻ともいわれ、伊勢・長谷・室生などに参る旅人の多くはこの街道を通りました。かつてはこの榛原もさぞ賑わっていたでしょう。旧南都銀行前に「右いせ本かい道 左あをこ江みち」の道標があります。

この辻の前に旧旅館「あぶらや」があります。この旅館に国学者本居宣長が一七七二年吉野旅行の際に宿泊したそうです。その時に書かれたのが『菅笠日記』です。「あぶらや」の前には「本居宣長公御宿泊・あぶらや」と書かれた木札が掲げられていて往時が偲ばれます。「あぶらや」は、伊勢参詣が隆盛を極めた頃の面影を今に伝える数少ない遺構として貴重なものです。

『菅笠日記』上の巻には、榛原について次のように記されています。

いしづみのしるべなくは。必まよひぬべき所也。けふはかならず長谷迄物すべかりけるを。雨ふり道あしくなどして。足もいたくつかれにたれば。さもえゆか。はいばらといふ所にとまりぬ。此里の名。萩原と書るを見れば。何と

かやなつかしくて。秋ならばしかば。かりねのたもにも。

うつしてもゆかまし物を咲花のをりたがへる萩はらの里。とぞ思ひつづけられる。

午後 この「あぶらや」にて菅谷先生のお話がありました。

「宇陀東吉野の歴史について」と題して、伊勢本街道を歩くにあたっての総論的なお話でした。その後、九四歳の先生が率先して、「萩原の辻」「宋祐寺」「墨坂神社」を案内してくださいました。墨坂神社の階段で元女子生徒の誰かが先生に手をかそうとすると、「いや大丈夫」と一人で登られました。墨坂神社について史伝などについて話をされましたが、大阪大学教授だったH君が「菅谷先生は、なんで何年に何があつたかとか空で言えるねん」と驚いていました。私は、先生のお話の内容よりも、ただただ、その「先生の姿」に圧倒されてしまいました。

(宋祐寺)

融通念仏宗榛原本山で、大和国南部に末寺五〇カ寺、檀信徒三〇〇〇軒におよびました。本尊は十一尊如来像で、本堂には重要文化財の木像多門天立像なども祀られています。本堂天井にはチベット仏教の流れをくむネパール様式の百八観音像が描かれています。カトマンズ在住の仏画家ケダル・シャキ氏によって平成一〇年に描かれたもので、日本におい

ては類を見ない珍しいものでした。本堂下には自然石でできた芭蕉の句碑があり、

梅が香に のつと日の出る

山路かな はせを

文化十三年(一八一六)とありました。文化の薫り高いお寺でした。

(墨坂神社)

崇神天皇九年疫病を鎮めるため「赤盾八枚、赤矛八竿をもって墨坂神をまつれ」とのお告げにより建立されたと伝えられる神社で、もとは西峠の近く天の森に祭られていたのを文安六年(一四四九)に現在の場所に移しかえたと伝えられます。

フィールドワークの後、菅谷先生を囲んでの懇親会が榛原牛の名店「福寿館」でありました。

内容の豊かな同窓会の日でした。ただ酒を飲んで盛り上がるだけではなく、「歩いて、学んで、そして、もちろんビールで乾杯する」何だか健康寿命が延びそうです。

私は、私である、という勇氣

下村嘉朗

女性を決して弱くはない、弱そうに見えるだけである。30年ばかりおしやれ

なおばちゃんたちを見てきたが、彼女たちの生きざまは個性的で生き生きとしていた。

かなり趣味的な店であった事にもよるのだろうが、他人の目を気にせず、自分を表現する感性と度胸を持っていた。

彼女たちの想いを要約すると

- ① 他人と同じものは着たくない。
- ② 皆から褒めてほしい訳ではないが、分かっていない人から褒められたい。
- ③ 何となく品よく着たい。
- ④ 周りの人から批判されても動じない、何を着ようと私の自由よと言え度胸を持っている。

私は、まったくおしやれについての感性や知識を持っていないにも関わらず、おしやれな人たちを相手にする仕事をして新しい発見を多くの客から得たのである。何を商っているのか分かりづらい店構えであるので引き戸を開けて入るだけでも勇氣があると来店した客は言う。それにも関わらず、独りで堂々と入ってくる人が多かった。

しかし、数人のグループが好奇心でわざわざ来られることもあったが、ほとんどは客にはならなかった。客になる人は、独りで遠慮がちに入ってきて、余計な事を言わずに商品を丁寧に見る。身のこなしと丁寧さがポイントである。それとハツキリとした大きな声、何となく感じさせる知的好奇心。

声は非常に大事なことである。これまでの経験から言えば、声の大きな人は、耳の悪い人を除けば、自信がある人である。自分の想いをハッキリ言う人には、対応がしやすいが、言わない人には対応が難しい。

初めての客で何も言わずに商品を見て人に対しては、その人の身なりや態度から色々なイメージを想像して、いくつかの言葉を投げかけてみる。言葉でダメならいくつかの商品を取り上げて客の反応を見る。

そんな事をしばらくしても、何も反応を示さない客は、たいがいすぐに帰ってしまう。

しかし、大きな声で笑顔で受け答えしてくる客が大半だ。私は、いくつかの話を引き出しの中から客に合いそうな話題を引っ張り出してきて話をする。

緊張した雰囲気や和らげ親しい雰囲気を出るだけ早く作りたいからである。

普通だと、まず褒める。美人であれば、きれいですね。スタイルがよければ、何を着てもよくお似合いになるでしょう。持ち物も褒める。バックも褒める。何も褒めるものが無いと感じた時には、客が醸し出す雰囲気や褒める。

最後には、客の出身地を尋ね、ご主人の出身地も聞き、二人のなれそめを聞く。ついでに二人の仕事関係をも聞く。

ここまで聞き終えたら、客の凡その環境がわかる。なんでそんなことを聞くかと言

えば私は全ての人に関心があつて、どんな環境で生きてきたのか、今生きているのか興味があるからである。

物売りよりも人に関心があるといつても過言ではない。入りにくい店構えで何を売っているのかわからない店だから、当然来店する人は限られている。暇な時間を持って余していると言えはそうかもしれないが、人ほど面白いものはないというのもまた事実である。

私のような店は公共的な場であると考えている。誰でも自由に出入りし話をしてもいい所だと。だから、どんな人が来るかわからないからまた面白い。どんな話ができるか興味をわいてくる。

親しくなつてくると、ご主人にも言っていないような秘密をたびたび聞くことになる。

家庭の事情もよくわかる。もちろん私が他言しないと信用されているから、話されるのだからが実に興味津々のことが多い。

なじみ客は、世間的には比較的余裕のある裕福な人たちだろうが、家庭内の経済事情はどこも同じように苦しい。しかし、数万円の金をどこからか捻出し散財されるわけだからしっかりと知っていると言えはいるが、彼女たちの金銭感覚には、貯金という文字はないようにも思える。

面白い話はいくらでもあるが、ある客は、私のところで買った安い物袋を裏戸において玄関から入り、後で裏戸の袋を取りに行き、主人や家族の目をまかせと言われ

た。電話も手紙も送らないで、私がこの店で買っているのが主人に知られたくないからと。こんな苦勞をしてまで買物に來ていただく訳だからありがたい。

また、分かりやすい話を聞いた。私学の小中学校へ子供を通わせているお母さんである。派手な服を着飾る保護者会に行くとき、何を着ていくか、本当に迷う。数十万の服であっても何度も同じ場所へ着ていけない。また、偶然に同じ服を着ている人に出会った時のショックは強くて、二度と着る気がしない。

その点、着物から作った服は、同じものはないし、ブランドものの服に比べれば安いし助かるわ。しかも、周りの人が値踏みしようにも分らないから。確かに値段がわからない。100万を超える紬で作ることもあるから、服の値段はまちまちではつきりしない。

ある時、誰かの紹介で來られた女性は、スタイルも綺麗な美人であった。変わった苗字だったので「もしやして、〇〇会社の社長と関係ありますか」と聞くと「そうです、家内です」

「先日、雑誌に載ってましたので思い出しました」一部上場会社の社長夫人かと思うと商魂たくましくするところだが、その美貌に見とれてしまった。祇園の女將を思わせる艶っぽさである。

幾度も店へ通って頂きお買い上げいただいたが、印象に残ることがある。それは、ある時、中国の大阪領事が中国へ帰国され

るので、ヒルトンホテルで夫婦同伴の4人で会食することになったので何を着ていったらいいのかわからないから相談に來られた。

私は、とつさにこれでどうですかと一点のワンピースを差し出した。白地の大島紬に桜の模様がちりばめられた春らしい模様であつたから、これで勝負してくださいと薦めたのである。少し戸惑いながらも夫人は買つて歸られた。

後日、來られて「領事にすぐ褒めて頂きました。生地も柄も非常にいいと」「やはり分かる人には分かるんですね。主人なんかは、他の服を着たらなんて言っていたくせに、領事が褒めたら一気に気が変わりました。お前は服を選ぶ目がある」と褒めるんですよ。と笑つて言われた。

女性には、男にない感性がある。一番よく聞く話では、こんなのがある。

数十年のなじみ客が言われるのは、私の着ている服を後ろから引つ張るのよ。誰かと思つて振り向くと知らない人が「この服高かったですよ。どこでお買いになったんですか?」と歩いていても、エレベーターに乗っている時でも声を掛けられる。危ないし嫌だから、「さあ、どこでしょうね?」と無視するのよ。欲しかったら、探したらいいじゃないの。私は、絶対に店の名前を言わないの。

一方では、こんな客もいる。博多の料理屋で生まれ育つた元気で聡明な人だ。男に生まれていればなあ、と思わせる剛毅で繊

細な女性である。

この人とは、20年以上の付き合いになるが、どれだけ多くの客を紹介してもらつたことか。

しかも、長く続く良い客が多い。本当にありがたいお客様でした。

彼女は、家計簿を怠らず全ての経費を分類し無駄なことはせず、家の財務管理を完璧に行つておられた。ご主人が某都銀の支店長であつたから部下やその家族などとの社交も完璧に見えた。いや、この奥さんがいたからご主人が出世されたとも思える。

歌舞伎座や病院などで声かけられた人に丁寧な私の店を教えて下さり、後も手紙や電話でフォローする徹底ぶりである。我が店の影の番頭さんのような人であつた。生まれ持つた商売人の氣質が素晴らしく、サラリーマンの奥さんにしておくのは惜しいいつも思つていた。彼女は、この芥川だよりの良き購読者で隅々まで読むといつもおっしゃっていました。

編集後記

アメリカやオーストラリアなどでの森林火災が多く発生しています。これも地球温暖化の影響でしょう。温暖化防止は、待ったなしの問題です。



にんげんを見飽きた花から
散つてゆく

水中に住んでいても、人の世のことは伝わって来る。近頃の人間は、子どもも大人も、大声でよくしゃべるからだ。水の中にも聞く耳はあるんだよ。

表題は、今年の初夏のある俳句大会でおよそ六十名による互選の結果、一六五〇余句の中から大会賞を受賞した俳句だ。作者は、俳人の谷川彰啓氏。それを知ったのは、私の穴倉がある川の堤をよく散歩する老人夫婦の会話からだ。爺さんが俳句大会のことを婆さんに報告していた。

「大会賞は面白い俳句だった。まるで、わしの好きな川柳みたいだ。もつとも中人だから、わしが知っている川柳の会なら絶対に認めない句だ。五七五の定型か自由律か、季語が有るか無いかなど、俳句の方が自由なのか。それとも、型に厳格なのは、わしの知っている伝統的な本格川柳の会だけなのか。そうそう、わしも大会に俳句を出して、八句選ばれた優秀賞に入った。ヘイタイもコメもデンキも出して過疎―まるで川柳だ」

話はそれから、いつものとおり、アベ一強政治の話になった。先の俳句との関係で耳をそばだてたのは、安倍首相主催の「桜を見る会」のこと。

菅官房長官は、「各界で功績、功労のあった方々を幅広く招待している」と言うが、どうやらこの会が、首相の地元後援会関係者を数百人の規模でおもてなしをする場になつている、との疑惑があるらしい。桜を見る会は内閣の公的行事として税金で行われる会だ。例年一万人前後であった参加者が、安倍政権下で昨年一万八千人を超えた。また予算も例年の三倍、五千二百万円余になつたそうだ。これじゃあ、「人間を見飽きた花から散る怒り」だ。この俳句、安倍さんに贈りたいものだと思つたことよ。

それから、先の台風十九号による惨状に話は移つた。中部地方から関東、東北地方などの広範囲にわたり惨憺たる被害があつた。十月十二日上陸、情報では死者八十八名、不明者七名、四万六千棟以上の家屋が浸水、河川決壊は七県六十四河川一ヶ所を超えた。「国土強靱化」は体裁のいいお題目だったのか。台風から二週間後の十月二十五日、千葉県などではわずか半日の間に十月

一ヶ月分の雨が降り、死者十一名、不明者二名という被害が続いた。

この台風災害直後の政権の言い分がふるつていた。自治体の要請を待たず、予備費から七億円の物資を送ると発表（その後、激甚災害・非常災害に指定。対策費は格段に増えるだろうが）。七億円か、有り難いことだ、でも待てよ。十月二十二日の「即位礼正殿の儀」などの関連予算は一六七億円（平成のときは一二四億円弱）だつて。また、トランプ氏が、「日本が一〇五機も買ってくれる」と大喜びしたF35ステルス戦闘機は、一機が一六億円もする代物だ。戦争は、武器ではなく外交の努力で防ぐものだ。持つべきは武器でない、外交の能力だ。どこかの大統領と、何の成果もない首脳会談を二十数回もした、などと得意がって何になる。

戦争と違って、雨も風も地震も、どんなに努力しても自然が猛威をふるわないようにすることはできない。ならば政治は、国民の金を武器よりは、防災にこそつぎ込むべきである。防げる戦争に金を注ぎ、防げない自然災害に言い訳ほどの金しか使わない。それは国民のための、まともな政治ではない。国民の安全

と安心、暮らしが第一の政治ではない。

このように、この老人夫婦は私の住む川によく散歩に来ては、よく政治の話をしてくれる。おかげで私も少しは人間の政治がわかつて来た気がする。

俳句

土田 裕

露けしや毎年直す遺言書
はや傘寿露にも似たる余生かな
朝夕の雨戸開け閉め秋の風
秋あかね空の広さを知り尽くす
住む人の仔細は知らず秋簾

影山 武司

生駒より爽籟渡る平城宮
底紅の花びら畳み日の名残り
蓑虫や位置定まりて孤独なる
不条理の台詞の迷路そぞる寒
吹きこぼるる釜の泡立ち豊の秋
知恵の輪のことりと外れ良夜かな
団栗が顔を出しある子の拳
月浮かべ波の調べの崩れ初む
自然薯の山気を包む新聞紙
ローカル紙に包まれ届く林檎かな